法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

中期ニーチェにおける哲学的方法としてのイロニー―価値転換と創造への契機―

和田，基樹

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
60
(開始ページ / Start Page)
17
(終了ページ / End Page)
24
(発行年 / Year)
2008-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003128

Hosei University Repository

中期ニーチェにおける哲学的方法としてのイロニー
—— 価値転換と創造への契機 ——

人文科学研究科　哲学専攻
博士後期課程１年　和　田　基　樹

はじめに

本稿では、中期ニーチェにおけるイロニーの位置づけとその意義について考察する。そしてニーチェのイロニーが、価値転換をなし、創造の契機へとつながる一つの哲学的方法であったことを明らかにする。

これまでのニーチェ研究において、彼のイロニーは「権力への意志」や「ディオニュソス的なもの」といったテーマに比べて、注目を浴びる機会の少ないものであった。ニーチェのイロニーが、一方でトーマス・マンやムシルMusilに対して大きな影響を与え、同時にベーダ・アレマン[1]によってドイツ文学史の中で重要な位置づけを受けたにもかかわらず、他方哲学の側からのニーチェ研究においては論じられてこなかったのである。

しかし、1970年代以降、少しずつではあるものの、このイロニーにも関心が集まるようになってきた。たとえば、エルンスト・ベーラー[2]はいち早くニーチェにおける多様なイロニーの分類を行い、詳細に分析を試みた。そこで彼はイロニーの思想史的文脈にまで遡り、この概念とニーチェ哲学との関係に着目していった。だが、この成果はイロニーとニーチェ哲学の関連性を示しただけであり、ニーチェ哲学におけるイロニーの身分は、十分に明かされなかったといえよう。

また、タルモ・クンナス[3]は、イロニーの認識論的な機能と、価値を相対化する役割を見出し、イロニーとニーチェ哲学との関係により立ち入っていった。その著作で彼はベーラーが触れなかったイロニーの位置づけを試みた。つまり、イロニーがニーチェ哲学の中でもっている認識論的機能と価値相対化の役割を、中期ニーチェの「武器」として位置づけたのである。クンナスの功績は、何よりもイロニーを認識の手段とした点にある。アレマンのように、文体の問題からイロニーを考察するだけに留まらず、認識論的イロニーをニーチェの中に見出したのである。しかし、彼は、遠近法主義Perspektivismusとイロニーとの関係に深く立ち入らなかったために、ニーチェにおける他の概念とイロニーとのつながりを不明瞭にしてしまった。また、自己イロニーに対して否定的な態度をとっており、これにただ「格下げ」の効果しか認めなかった。このことによって彼は、ニーチェのイロニーが新たな創造の契機へとつながる側面を見逃してしまうのである。

本稿は、こうした研究史とその成果を踏まえたうえで、イロニーが中期ニーチェにおいて遠近法Perspektiveの一側面となっていたことを明らかにしたい[4]。これによってニーチェ哲学におけるイロニーの位置づけを明らかにしていく。そのため、まずは中期ニーチェにおける遠近法について考察する。この作業によって、遠近法のもっていた役割が、異なる価値観を対置することによって既存の価値観を相対化するものであった、ということを

1　Beda Allemann, *Ironie und Dichtung*, Günther Neske Pfullingen, 1956,

2　Ernst Behler, Nietzsches Auffassung der Ironie, in: *Nietzsche-Studien*, Bd.4, S. 1-35, 1975

3　Tarmo Kunnas, *Nietzsches Lachen – Eine Studie über das Komische in Nietzsches Werken*, ed.Wissenschaft&Literatur, Hrsg.von Frido Flado, 1982（『笑うニーチェ』タルモ・クンナス　杉田弘子訳　白水社　1986年）

4　イロニーと遠近法との親近性を指摘する研究はこれまでにも存在していた。例えばRichard Lowell Howey, *Some Reflections on Irony in Nietzsche*, Nietzsche-Studien, Bd.4, 1975, S. 36-51がいる。その論文の中で、ハウェイは次のように考察する。「イロニーのこの形式に関するニーチェの使用は、頻繁になされ、また複雑なものである。ニーチェの攻撃は、しばしば辛辣で当て擦りなものであり、また頭から否定的であったようにさえみえる。［だが表面的なものにとらわれず、］こうした攻撃の根拠や特徴を理解することが重要である。ニーチェのおこなった、他の哲学者たちに関する批判の基本的教義は、次のようなものである。すなわち、われわれの態度が一枚岩的なものになることは決して許されない、ということである。」（［］引用者による補足）こうしてハウェイは、『善悪の彼岸』でニーチェがカントとショーペンハウアーを批判の対象にした箇所（JGB, Aph.5, S. 13）を引用し、また『悲劇の誕生』（GT.18, S. 114）では宥和的にさえ考えていたことを挙げる。これによってニーチェの視点が多角的であったことを主張する。しかしながら、クンナスも指摘するとおり、二つの著書には約15年もの時間的隔たりがあるだけでなく、思想の内容においても（特に形而上学、観念論に対しては）変化しているのであって、何らかの手続きを踏むことなしには、比較の対象にすることすらできない。Vgl, Kunnas (1982), S. 162

Hosei University Repository

示していく〔1〕。次に遠近法とイロニーの類似点を解明することで、両者の関係を浮き彫りにしていく〔2〕。また、イロニーが、たんなる批判的認識の手段に尽き、価値相対主義に留まるものではないことを示し〔3〕、自己イロニーという相をも含んでいたことで、創造の契機へと向かう、より積極的な意義をもったものであることを解明していく〔4〕

1　中期ニーチェ哲学における遠近法

中期著作においては、後期の著作ほど頻繁に「遠近法Perspektive」ないし「遠近法主義Perspektivismus」という語が使われているわけではない。だが、後のニーチェ自らが「遠近法」と呼ぶにたる態度は、この時期すでに表れているのである[5]。ここでは中期ニーチェにとっての遠近法がいかなるものであったのかを見ていこう。

まずは次の引用からはじめたい。

> 現象と物自体 —— 哲学者たちは、次のようにして、生や経験の前へと、彼らが現象界と呼んでいるものの前へと身構えるのが常である。すなわち、ただ一度きりで展開されていてein für alle Mal entrollt ist、不変で確固とした同じ事象を示しているような一つの絵に向かうように身構えるのである。[中略] 今われわれ人間にとって生や経験を意味するあの絵は、次第に生成してきたのであり、それどころか全く生成Werdenのうちにあり [中略] 確定した大きさとみなされるべきではない、という可能性が見落とされている。(MA I, Aph.16, S. 36)

ここでニーチェは「存在」に対して「生成Werden」という、異なった観点を対置させている。プラトン以降、自明のこととされるようになった、不変で「確固とした存在者を認識し、実在に関する確実な知識を得る」[6] という認識に対して、生や経験が「生成のうちに」あり、「確定した大きさとみなされるべきではない」ことをニーチェは主張するのである。つまり、この生や経験が、一枚のキャンバスの上に「ただ一度きりに」全てが表現しつくされ、完成された絵画のようなものではないということである。ではこのことがどのように「遠近法」と結びついていくのだろうか。もう一つの引用をみてみることにする。

> 人間性の循環Kreislauf des Menschenthums —— おそらく人間性全体は限られた期間における一定種類の動物の一発展段階eine Entwicklungsphaseにすぎないであろう。だから、人間は猿から生じてきてgeworden ist再び猿になるであろうwerden wird。とはいえ、この奇妙な喜劇の終幕に何らかの興味を抱く人は誰もいないのだが。ちょうどローマ文化の衰退やそのもっとも主要な原因であるキリスト教の普及とともに、ローマ帝国内で人間の全般的な醜悪化が広まったように、地上文化全般の将来の衰退によっても、はるかにもっとひどい人間の醜悪化や、ついには猿のようなものにいたる人間の動物化などが惹き起こされうるだろう。 —— まさにわれわれがこの遠近法Perspektiveに注目しうるが故に、おそらく将来のこのような結末を予防することが出来るのである。(MA1, Aph.247, S. 205f)

ここでもまた生成するものが、「発展段階Entwicklungsphase」という語によって示されている。「人間が猿から生じてきてgeworden ist、猿へと成るだろうwerden wird」という言葉には、人間が何ものかから生成してきたという過去と、これから何ものかへと生成していくという未来を語るだけでなく、その間にある現在の人間もまた未だ生成のうちにあるということが仄めかされている。ところで、ここで言う「ローマ帝国」「キリスト教」は、完成したもの、終わったもの、干からびたものを意味していると考えられる[7]。前の引用箇所と同様に、「存在」に対して「生成」という観点が置かれ、また進化論Entwicklungslehreという直線的な進歩思想に対しては、円環的・循環的な観点が立てられている。このアフォリズムでは、このようにして、ある価値観やある観点に、それとは対立する価値観や観点を立てることを「遠近法」と明言したのである。

5　このことは1886年春に付け足された『人間的、あまりに人間的』第一巻序文においても触れられている。KSA, Bd.2, S. 20

6　内藤可夫『ニーチェ思想の根柢』晃洋書房、1999, p. 69

7　アフォリズム113番「骨董としてのキリスト教」と、この註がつけられている247番で語られているキリスト教は、進化も退化もせず、骨董品として、したがって生成の反対物として位置付けられている。　MA I, KSA, Bd.2, Aph.113, S. 116f

Hosei University Repository

ところで、後期ニーチェにおいて、この遠近法というものは変容する。すなわち、権力への意志Wille zur Machtと結びついて「自らの力の増大という条件と見合わせて解釈を行い、価値付けを行うもの」[8] として位置づけられていくのである。では、未だ「力の増大という条件」が顕在化されていない中期ニーチェにおいて、遠近法の射程はどのような範囲にまで及びうるのであろうか。『人間的、あまりに人間的I』(1878年) の8年後に付け加えられた序文には、当時を振り返って次のように記されている。

彼は自分を魅了するものを引き裂く。彼が包み隠しているものを、何か恥じらいながら大事にしていると見えるものを、悪意のある笑いmit einem bösen Lachenでもって回転させる。こうしたものが引っくり返されるとどのように見えるかを試みるのである。(MA1, Vorrede 3, S.17)

汝はあらゆる価値評価において、遠近法を会得すべきであった。すなわち、地平をずらしたり歪めたりすることや、地平を見るための目的論を。そして遠近法に必要な一切のことを (MA, Vorrede 6, S.20)

ここで留意しなくてはならないのは、78年当時のニーチェにとって重要だったものが、後の権力への意志ではなく、自由精神freier Geistだったことである[9]。これは、新しい価値の定立より、むしろまず支配的な諸価値からの解放、価値転倒に強勢が置かれる。そのため先に見てきたように、この書物の価値評価というものが、新しい価値観の創造というよりは、既成価値の反対物として現れているのである。その例が、一つの「絵」として捉えられてきた価値観を、いわば騙し絵として扱い、異なった視点を提示することであり、また、直線的発展的時間に対して循環的時間を対置することであった。つまり絶対的で確実と考えられてきたものに対する真逆のものの対置によって、異なる解釈の可能性を提示し、「地平をずらしたり、歪めたり」することである。「遠近法による無数の解釈から成り立った世界には、もはやいかなる客観的事実もない」のである[10]。こうした態度が中期ニーチェの遠近法である。

では、遠近法はどのようにしてイロニーと関係するのであろうか。「事実とは逆のことを述べる」とする修辞学におけるイロニーの定義を傍らに携えて、次に遠近法とイロニーとの関係について立ち入ってみよう。

2　遠近法とイロニー

ではこのような遠近法とイロニーにはどのような関係が存するのだろうか。長くなるが、再びニーチェのアフォリズムを分析することからはじめよう。

認識に付随する快楽 —— 何ゆえに認識、すなわち研究者や哲学者の本領は、快楽と結びついているのだろうか？第一に、そして何よりもまず、そのさい人は自分の力Kraftを意識することになるからである。したがって体操の練習が観客なしでも快いのと同じ根拠からである。第二に、認識の過程で以前の諸表象やその代表者を乗り越え、勝者となるか、少なくともそうであると信じるからである。第三に、われわれが自分たちを、ほんの小さな新しい認識によってもなお万人を超えて崇高と感じ、この点で正しいことを知っている唯一の者と感じるからである。これら三つの快楽の根拠がもっとも主だったものではあるが、しかしながら認識する者の本性に応じてまだたくさんの副次的根拠がある。[中略] というのも、学者が成り立つために「非常に多くの人間的な衝動Triebeや小衝動Triebchenが注ぎ集められなくてはならない」ということが真実であるなら、また、学者は確かにとても貴い金属ではあるが、決して純粋な金属ではなく、「非常に種々の動因Antriebeや刺激の錯綜した網状組織Geflechtからできている」ということが真実であるなら、そうであるなら結局このことは同様に芸術家、哲学者、道徳的天才 —— 及びあの書 [『反時代的考察』] の中で栄光を与えられた偉大な名前の示しているような人々の成立や本質にも妥当するからである。一切の人間的なものは、その成立に関し、イローニッ

8　信太正三『永遠回帰と遊戯の哲学』勁草書房　1969年 pp. 256

9　『人間的、あまりに人間的』第一巻の副題が「自由精神のための書*ein Buch für freie Geister*」となっていたことから、当時のニーチェがもっていた関心の度合いが窺える。

10　信太正三　上掲書　pp. 258

Hosei University Repository

シュに観察されるに値するAlles Menschliche verdient in Hinsicht auf seine Entstehung die ironische Betrachtung。それゆえイロニーはこの世界においてこのようにあり余っている（überflüssig）のである。(MA1, Aph.252, S.209f)

この文の冒頭に、「何ゆえに認識、すなわち研究者や哲学者の本領は快楽と結び付いているのだろうか？」という問いかけがあるが、「研究者」や「哲学者」の本領たる認識は、本来快楽ではなく、真理と結び付けられるはずである。この書き出しは、事実に反することを述べている反語である。このように考えるのは「研究者」や「哲学者」ではなく、ニーチェその人である。事実とは逆のことを自明のこととしてとらえ、しかもそれを疑問符付きで問い掛けてくるのは、キケロ、クインティリアヌスらがいう「dissimulatio（Verstellung）」としてのイロニーを彷彿させる[11]。つまりこのアフォリズムは冒頭からすでに、通例の理解とは異なる地平から事物を眺めるというニーチェの遠近法主義に支配されたものであることを教えているのである。

ただし、われわれは、ニーチェの文体上に表出されたイロニーを追っていくだけに留まってはならない。これは外面的なものであって、そもそも「偽装Verstellung」なのであるから、われわれはこれを一枚一枚剥ぎ取らなくてはならない。では、このアフォリズムに込められたイロニーの内実に迫っていこう。

まず取り上げたいのは、「学者は確かにとても貴い金属ではあるが、決して純粋な金属ではなく、『非常に種々の動因Antriebeや刺激の錯綜した網状組織Geflechtからできている』」という箇所である。ここにおいて、1で考察したような遠近法が用いられている。すなわち、学者というものを「貴い金属」としてとらえるような素朴な視点に対して、よりこの金属に接近し、細部を観察することを要求するのである[12]。この作業によって明らかとなるのは、彼ら学者が高貴で崇高な認識の従者などではなく、「諸々の人間的衝動menschliche Triebe」から成っていること、つまり「あらゆる人間的なものAlles Menschliche」のうちの一つであるということである。こうした人間的なものには、学者のみならず、芸術家、哲学者、道徳的天才、及び『反時代的考察』で取り上げられた人々が含まれ、これらが皆、「イローニッシュな観察Betrachtungを受けるに値する」と断言する。そして最後に「・・・それゆえイロニーはこの世界においてこれほどあり余っている」と締めくくるのである。

ここで次の二点に留意したい。第一に、なぜ人間的なものがイローニッシュな観察を受けねばならず、またイロニーが世界にあり余っているのか。第二に、「芸術家、哲学者、道徳的天才」が何を意味するのかである。この答えは第二点から考察を進めることによって解明される。というのも、引用の文脈から考えると、第一点の「人間的なもの」に代入されるのがこの三者だからである。

「哲学者」が意味するものについては、すでに述べた通り、哲学者の本領たる認識は本来快楽ではなく、真理と結びついているはずだから、この語が意味するのは真理である。そして、「芸術家」の認識の本領は美であろう。また「道徳的天才」の認識の本領は善のはずである。すなわち、ニーチェが言おうとしていたのは、一切の価値の根底をなす真善美はどれも人間的な衝動を隠したものからなる織物Geflechtであり、決して普遍妥当的なものなどではない、ということである。

こうして得られた答えは、われわれが知っている真善美という価値観が偽装されたもの、すなわち本来の姿とは真逆の滑稽物であるというイローニッシュな視点であり、それによると世界の諸価値はすべて滑稽なものであるということである。つまり世界はイロニーに溢れかえった、笑うべきものであり、いわば「世界史のイロニーwelthistorische Ironie」[13] ということになる。ここでニーチェは、この世界にあるものが絶対的な価値をもたず、またそのような価値基準もなく、あるのはただ解釈Interpretationのみ[14] と主張するのである。

このアフォリズムにおいて、1で見てきた遠近法と、イロニーとの類似点が浮き彫りになってくる。遠近法は、「地平をずらしたり、歪めたり」することによって、事実とされてきたものや常識とされる価値観に対して異なる観点を立て、あるいは異なる観点から眺め、その絶対性を揺るがせるものであった。ただし、これはあくまで観察者の側の観点に属する。

11　Vgl. Behler (1975), S. 4　ここでベーラーは、ギリシア語のεἰρωνίαがキケロによってdissimulatio（偽装）という意味を含むようになり、クインティリアヌスによっては、話者の意図と言説の不一致、あるいは聞き手が言説において表現されたこととは反対のことを理解するという意味付けがなされたことを指摘している。

12　1839年にシュワンとシュライデンによって細胞説が唱えられたが、これは言うまでもなく顕微鏡による功績である。19世紀、生物学を中心とした科学の発見はニーチェにも影響を与えているが、観察者の視点を変えるこの顕微鏡と遠近法も無関係ではないだろう。

13　AC, KSA, Bd. 6, Aph. 36, S. 208

14　KSA, Bd.12, 7[60], S. 315

Hosei University Repository

また、イロニーとは、そもそも修辞学の一部門であるが、同時に滑稽や笑いの一要素としても重要な位置を占めるものである。滑稽、笑いにおけるイロニーの役割とは、何よりもまず、対象を格下げするherabsetzenことにある。俗にいう「格下げ理論」と呼ばれるものである[15]。遠近法は、上述の通り、ある価値を相対化するものであったが、あくまで「一定の『位置』ないし、『立場』に依拠した『解釈』」[16]であった。しかし、イロニーはこうした笑いの要素でもって価値を無に帰するためのより徹底された方法として、哲学者ニーチェの重要な「武器」となっていたのである。そして、「イローニッシュな観察die ironische Betrachtung」つまりイロニーを伴った観点から眺められることによって、ある価値観は逆転したものにされるのである。イロニーのこうした効果は、価値転倒へとつながるものであり、中期ニーチェの思索においてなくてはならない哲学的方法となっていた。

ここで二つの問題が生じる。第一に、ニーチェのイロニーとは、あらゆる価値観を破壊し、ニヒリズムを生み出すために用いられるのだろうかという点である。

二点目の問題は、上のアフォリズムで言われている「認識Erkenntnis」のもう一つの含意に着目することで生じる。この語には通常用いられている意味の他に、また一つ別の綾が含まれている。それは引用中で触れられていた「自分の力を意識する」ような認識であり、また「以前の諸表象やその代表者を乗り越える」ないし、そう信じさせるような認識、さらには「万人を超えて［自らを］崇高と感じる」ような認識である。ニーチェが認識を快楽と結びついたものとするとき、こうした高慢な認識は優越感という名の快楽としてイロニーと関係するのである。ニーチェは、イロニーのこうした陥穽をどう捉えていたのか。

次に、照準をこの二つ問題へと向け、ニーチェがどのように乗り越えようとしたのかを探る。

3　価値転換のイロニーから自己イロニーへ

ここまで遠近法とイロニーの関係を考察してきたことによって、二つのことが見えてきた。第一に、現今の諸価値の支配する世界が、本来の姿とは逆転しているにもかかわらず、なおも絶対的で支配的であるということ。そして第二に、このような価値観をさらに転倒させようとするニーチェの試みが示されるということである。中期ニーチェが所謂「曝露心理学Entlarvungspsychologie[17]」という考察方法であらゆる価値を批判するとき、この第二点に挙げたイロニーは彼の思想にとって重要な武器となった[18]。ただし、ニーチェはたんなる相対主義者でもなければ、優越感のための独断的価値観に満足する者でもない。こうような破壊力をもつイロニーがどのような帰結をもたらすのかを、彼は十分に自覚していた。読み手に対しソクラテスを喚起させるような仕方で、次のようにニーチェは論じる。

> イロニー ―― イロニーは、教え子たちとの交わりにおける教師の側からの、何か或る種の教育手段としてのみ所を得る。イロニーの目的は慢心を挫くことDemütigung、恥を知らしめることBeschämungであるが、しかしよい企図gute Vorsätzeを目覚めさせたり［中略］するような健康によい種類のものである。［中略］師弟の間のような、そういう関係が執り行われていないところでは、イロニーは一つの悪癖であり、一つの卑俗な情動ein gemeiner Affektである。［中略］イロニーは、毒舌の習慣と同様、とにかく性格を堕落させる。それは次第に意地の悪い優越感eine schadenfrohe Ueberlegenheitという特性を授ける。ついには噛みつくことの他に嘲笑することLachenまで覚えてしまった噛み癖のある犬のようになる。（MA1, Aph.372, ）

この箇所は、二点においてイロニカーIronikerの陥る罠を警告している。一つは、前へと向かってvor何かよいものを定立するsetzenという企図のない破壊、あるいは創造性のない破壊が全くの無意味であることを指し示している。だが、この問題はアフォリズムの中で解決されている。つまりイロニーは、ただ価値を転倒させるために

15　杉田弘子「笑いの預言者、ツァラトゥストラ」『ドイツ文学　第85号』1996年pp. 34

16　牧野英二『遠近法主義の哲学』弘文堂 1996年 pp. 60

17　この語はニーチェのテクスト中には全く見られず、フィンクが好んで用いた語であるが、中期ニーチェの思想を簡潔に示した語であるためここに採用した。Vgl, Eugen Fink, *Nietzsches Philosophie*, W.Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1960, bes.S. 42

18　クンナス（1982)、S. 47「しかしまた彼〔ニーチェ〕は、彼にとって自身のイローニッシュな態度が論争的な取り組みのなかで武器として役立っていることも知っている。そのことは、まさにシュレーゲル的な意味でのイローニッシュな笑いであり、この笑いは彼の場合最も効果的に一切の神聖な真理や誤った確信を相対化するのである。」

Hosei University Repository

のみ用いられてはならず、創造的な契機を含むものとして効果を発揮するものなのである。

二つ目の問題点として、イロニーが「性格を堕落させる」ものであると語っている箇所に注目したい。このことは、２の終わりで掲げられたイロニーの引き起こす優越感という問題に替えられよう。ではこの問題はどう解決されるのだろうか。

ニーチェはこのアフォリズムの中で、師弟関係を引き合いに出すことで、もう一つ別の意図を隠している。つまり「教師」と「教え子」をもち出すことによって、自己完結的でもなく、一面的でもない、二者間関係が意識されるのである。教師は、ソクラテスのように、無知を装い、教え子に語らせた後で、異なった意見や視点を提示するのである。ここでわれわれが見てきた遠近法とイロニーの関係が再び思い起こされるのであるが、このアフォリズムはさらに多くの襞をもっている。教え子の意識は、教師のイロニーによって、今度は「謙遜Gemütigung」と「恥を知ることBeschämung」に向かう。すなわち、教え子のパースペクティヴPerspektiveは自己自身に向けられることになるのである。教師が、教えを垂れることによって教え子のパースペクティヴを転回させるのではなく、イロニーをもって転回させるのである。教え子は自分の持っていたパースペクティヴを、イロニーという笑いの要素によって「格下げ」するのである。教え子は、教師のイロニーによって自ら自己を相対化し、現在の自己を笑い飛ばし、さらには乗り越えるまでに至るのである。

ここでイロニーは産婆術μαιευτικήとして用いられている。では、ニーチェによるこのようなイロニー観は、先に触れたソクラテスのイロニーに対してどのような新しさを提示できるのであろうか。

第一に、ソクラテスのイロニーとは、弁証法的な発展によって永久不変の真理へと到達しようとするものであった。だが、ニーチェにとってのイロニーとは、真理とされているものを格下げするものであり、このようにして真理ですら一つの視点Perspektiveから観察された解釈にすぎないことを暴露するものである。つまり、ソクラテスが目指していたような真理なるものが存在しないことを明かすものなのである。

第二に、「人間性の循環」のアフォリズムで見たように、事物は直線的に発展するのではなく、あくまで循環Kreislaufするものである。イロニカーであるニーチェ自身が上の引用のように語ることで、イロニーのもたらす優越感について、自らにも自覚的に戒める。こうした自戒によってニーチェは自己に対するイロニーの必要性を主張する。こうして、ソクラテスのように教師と教え子が固定された上下関係ではなく、教師も教え子としてその慢心を挫かれなくてはならないことを説くことで、イロニーの循環性が示されるのである。

われわれはこれで、ニーチェのイロニーが含む最後の相貌へと辿り着いた。それは自己イロニーである。このイロニーは、中期思想が円熟を迎える『悦ばしき知識』に至ると、笑いの要素が前面に押し出される。そうして「自己嘲弄」といういっそう強調された言葉で語られることになる。次は、まず自己イロニーから自己嘲弄への転回する過程を見出し、それから、自己嘲弄がどのようにして創造の契機となるかについて考察しよう。

4　自己イロニーから自己嘲弄へ ― 創造への契機 ―

ニーチェの思想から自己イロニーというものを取り出して考察する際、二つの面をみることができる。一つは、ギリシア語のεἰρωνίαを輸入する際に当初充てられたラテン語「dissimulatio（Verstellung）」に遡る。ベーラーが指摘するとおり、偽装Verstellungとはニーチェの場合「仮面Maske」を意味する[19]。そして二つめは、先に挙げたように、創造的な意志をもって自己を笑い、超克していく、自己嘲弄である。クィンティリアヌスは「話者の意図が彼の言ったこととは異なる」という点と、「われわれ聞き手が話者の言説で表現されていることと反対のことを理解する」という点にイロニーのメルクマールを見出した。一方では自己に対するこうした偽装が仮面Maskeへとすり替わり、他方では自己を笑い、越えていくということに、自己イロニーにおける、仮面と自己嘲弄という二面性が見られるのである。

クンナスが自己イロニーに否定的側面のみを見出すとき、彼は自己に対するイロニーから、「偽装dissimulatio」の意味しか導き出さなかったのである。クンナスは、自己イロニーの内包する仮面と自己嘲弄の二つの意味のう

19　Vgl. ベーラー（1975），S. 17　ベーラーは、偽装Verstellungのイロニーというものの核心的な現象がニーチェの場合、仮面にあることを指摘する。なお、この仮面の問題は非常に錯綜したものであり、またその意義の全容が明かされるのは『善悪の彼岸』であるため、本稿ではあらかじめ示唆するに留める。

Hosei University Repository

ち、ニーチェが「弱点を仮想敵たちの目から注意深く隠す」ところの「仮面」だけにしか意義を見出さず、自己嘲弄の積極的意義を見落としてしまった。こうした解釈は、ニーチェの文体上の問題に尽きるもので、ニーチェ哲学のなかで自己イロニーがどのような役割を果たすのかについて、クンナスは言及していない。

本稿の目的は、イロニーの積極的な意義を解明することであるから、さしあたってこの「仮面」の問題には深く立ち入らず、イロニーがどのようにして創造的契機へとつながるのかを見ていきたい。『悦ばしき知識』では、自己イロニーにおける笑いの要素が強調され、自己嘲弄へと変化するが、具体的にどのように語られているのであろうか。まずは次の引用を展開する。

> だが君は、君個人を全く最善のやり方で嘲弄するverspöttenすべを心得ているであろう者を決して見出すことはないだろう。また君の蝿や蛙の惨めさを、それが真理と一致しているように、十分肝に命じさせることができるような者を決して見出すことはないだろう！全くの真理から笑うために、当然の笑い方で自己自身を笑うことUeber sich selber lachen, wie man lachen müsste, um aus der ganzen Wahrheit heraus zu lachen —— このことに対して、これまで最良の者たちは、十分には真理感覚をもたなかったし、また最も天分豊かな者たちは多くの場合、あまりにごく僅かな天賦の才しか持っていなかった！おそらく笑いにとってもなお未来というものが存在する！「種が全てであり、個人とは常に何ものでもない」という命題 —— これが人間性Menschheitに摂取具現einverleibenされて、各人に常時この最後の解放と無責任性への入り口が開放されるとき、おそらくそのときは笑いLachenが知恵Weisheitと結ばれるであろう、そしておそらくそのときは「悦ばしき知識fröhliche Wissenschaft」だけがなおも存在することとなるだろう。(FW, Aph.1, S.370)

この箇所において自己イロニーは、「自己自身を笑うこと」へと変容している。先に挙げた「教師」と「教え子」の喩えと比較してみると、あのアフォリズムでは教師のイロニーによって、教え子は自己を相対化し、それによって一定の距離をもって自己を鑑み、乗り越えることができた。しかし、ここでは教師と教え子という関係はない。また、イロニーではなく、自己嘲弄によって、自己を乗り越えることになるのである。「君は、君個人を全く最善のやり方で嘲弄するverspöttenすべを心得ているであろう者を決して見出すことはないだろう」と言うとき、それは、他の誰でもなく、自分の笑い方で自分を笑わなければならない、ということを意味するのである[20]。こうして、イロニーは笑いという側面を強めることで、自己イロニーから自己嘲弄へと変わっていくのである。

では、こうしたイロニーの変化によって、どのようにして創造への契機を見出すことができるのだろうか。

> いかに多くのものが、なおも可能であることか！君たち自身を当然の笑い方で笑うことを学べ！／君たちが出来損なって、半ばしか出来上がらなかったとしても、何の驚くべきことがあろう、君たち、半ば砕けた者たちよ！君たちの中で押し合い、ぶつかり合っているのではないか —— 人間の未来が？ (ZA, *vom höheren Menschen* 15, S. 364)

ここで自己嘲弄と、可能性や未来という語が関係付けて語られている。ここでは現存する世界観とは異なる観点が与えられているようにも窺える。自己嘲弄が単なる自己の相対化に留まらず、新たな世界観の創造を担ったものであることをにおわせるものである。しかし、本稿ではあくまでイロニーが創造的契機を含んだものであることを指摘するに留まり、ここで考察を終えることにしたい。

おわりに

以上のようにして、本稿では次の点について考察してきた。まずイロニーと遠近法との関係に着目し、それによって、ニーチェにおける重要な思索の方法としての役割がイロニーに与えられた。これによって、イロニーがどのような「武器」として用いられたかということと、また同時にニーチェ哲学におけるイロニーの位置付けが解明された。次に、これまで研究されてこなかった見解を提示した。すなわち、第一に、ニーチェのイロニーが

20 Vgl. *ZA*, *Vom höheren Menschen*. 15, S. 364, und *Die Erweckung*.1, S. 386, KSA, Bd.4

Hosei University Repository

ただ価値を相対化するに留まるものではなく、そこから新たな創造性を含む企図でもって用いられなくてはならない、ということを示した。第二に、イロニーが自己にも向けられるものであり、自己嘲弄へと変化するということを明らかにした。またこの自己嘲弄という観点でクンナスとは視点を異にし、イロニーのもつ創造的契機の可能性を開くことができた。

ニーチェはイロニーを用いることによって、近代人のパースペクティヴを転換させようとした。こうした作業で彼は、キリスト教や合理主義、因習などによって弱められ、創造性を失っている生に光をあて、本来の力強さを取り戻させようとしていたと考えられる。その際ニーチェは、イロニーによってこうした諸価値そのものを揺るがすだけではなく、その価値を絶対的なものとする個々人のパースペクティヴを転換させようと試みたのである。

こうした価値転換によってもたらされるとした「未来Zukunft」の内実は明かされなかった。だが、これについて考える際、われわれはニーチェが何か究極目的のようなものを念頭に置いていたと見なすべきではない。１で見てきたように、ニーチェは、人間が未来において「より良く」なるという素朴な進歩史観をもっていたのではなく、絶えざる循環を主張していたのである。この「未来」は、後期思想との関係で今後解明していきたい。

凡例

ニーチェのテクストは以下のものを使用した。Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe (KSA), Hrsg. von Giorgro Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, München, Berlin / New York, 1980

上掲テクストからの引用のうち、刊行された著作の場合は、(　)内の左から著作の略号、アフォリズム番号／章番号、頁数の順で示した。例えば、(MA1, Aph.16, S. 36)は『人間的、あまりに人間的１』pp. 36アフォリズム16を意味する。

略号

引用した著作の略号とＫＳＡでの巻数については下記の通りである。

GT：	*Die Geburt der Tragödie*, KSA, Bd. 1
MA　I / II：	*Menschliches Allzumenschliches I / II*, Bd. 2
FW：	*Die fröhliche Wissenschaft*, Bd. 3
ZA　I -IV：	*Also Sprach Zarathustra I-IV*, Bd. 4
JGB：	*Jenseits von Gut und Böse*, Bd5
GM：	*Zur Genealogie der Moral*, Bd. 5
AC：	*Der Antichrist*